

湯島の境内

泉鏡花

青空文庫

湯島の境内 (婦系図—戯曲—一齣)

冴返る春の寒さに降る雨も、暮れていつしか雪となり、

仮声使、兩名、登場。

上野の鐘の音も氷る細き流れの幾曲、すえは田川に入

谷村、

その仮声使、料理屋の門に立ち随意に仮色を使つて帰る。

廓へ近き畦道も、右か左か白妙に、

この間に早瀬主税、お蔦とともに仮色使と行逢いつつ、登場。

往来のなきを幸に、人目を忍びイみて、

仮色使の退場する時、早瀬お蔭と立留^{たちどま}る。

お蔭 貴方^{あなた}……貴方。

早瀬 ああ。(と驚いたように返事する。)

お蔭 いい、月だわね。

早瀬 そうかい。

お蔭 御覧なさいな、この景色を。

早瀬 ああ、成程。

お蔭 可厭^{いや}だ、はじめて気が付いたように、貴方、どうかしてい

るんだわ。

早瀬 どうかもししていようよ。月は晴れても心は暗闇^{やみ}だ。

お蔭 ええ、そりや、世間も暗闇でも構いませんわ。どうせ日蔭

の身体からだですもの。……

早瀬 お蔦。(とあらたまる。)

お蔦 あい。

早瀬 濟まないな、今更ながら。

お蔦 水臭い、貴方は。……初手しよてから覚悟じやありませんか、ね

え。内証だつて夫婦ですもの。私、苦勞たのしが樂みよ。月も雪もあ

りやしません。(四辺あたりをみまわす)ちよいとお花見をして行きまし

ようよ。……誰も居ない。腰を掛けて、よ。(と肩に軽く手を

掛ける。)

慥たしかにここと見覚えの門とぼその扉とぼそに立寄れば、(早瀬、引かれてあ

とずさりに、一脚のベンチに憩う。)

お薦（並んで掛けて、嬉しそうに膝に手を置く）感心でしょう。

私も素人になつたわね。

風に鳴子なるこの音高く、

時に、ようようと蔭にて二三人、ハタハタと拍手の音。

お薦（肩を離す）でも不思議じゃありませんか。

早瀬 何、月夜がかい。

お薦 まあ、いくら二人が内証だつて、世帯を持てば、雨が漏つても月が射さすわ。月夜に不思議はないけれど、こうして一所におまいりに来た事なのよ。

早瀬 そうさな、不思議と云えば不思議だよ、世の中の事は分らないものだからな。

お薦 急に雪でも降らなけりや可い。

早瀬 (懸念して) え、なぜだ。

お薦 だって、ついぞ一所に連れて出てくれた事が無かつたじゃありませんか。珍しいんだもの。

早瀬 ……………

お薦 ねえ、貴方、私やつぱり、亡くなつた親の情が貴方に乗なさけのりう

憑つつたんだらうとそう思いますわ。……………こうして月夜になつ

たけれど、今日お午過ぎには暗く曇つて、おつけ晴れて出られない身体からだにはちようど可いい空合いでしたから、貴方の留守に、

お母つかさんのお墓まいりをしたんですよ。……………飯い田だ町まちへ行つて

から、はじめてなんですもの。身がかたまつて、生命いのちがけの願ねがい

が叶^{かな}つて、容子^{ようす}の可い男を持つた、お蔭はあやかりものだつて、そう云つてね、お母^{つか}さんがお墓の中から、貴方によく申しましたよ。邪険なようで、可愛がつて、ほうり放しで、行届いて。

早瀬 お蔭。

お蔭でも、偶^{たま}には一所に連れて出て下さいまし。夫^{いっしょ}婦^よになる
と気^{きぬけ}抜がして、意地も張^{はり}もなくなつて、ただ附^{くっ}着^ついていたがつて、困つた田舎嫁でございます。江戸は本郷も珍しくつて見物がしたくつてなりません。——そうお母^{つか}さんがことづけをしたわ。……何だかこの二三日、鬱^{ふさ}込^ぎんでいらつしやるから、貴方の氏神様もおんなじ、天神様へおまいりをなさいまし、私も

一所にツて、とても不可^いないと思つて強請^{ねだ}つたら、こうして連れて来てくれたんですもの。草葉の蔭でもどんなに喜んでいるか知れませんかよ。

早瀬 堪忍^こしな。嘘にも誉^ほめられたり、嬉しがられたりしたのは、私は昨日^{きのう}、一昨日^{おととい}までだ、と思つているんだ。(嘆息す。)

お薦 何だねえ、氣の弱い。掏賊^{すり}の手伝いをしたツて、新聞に出されて、……自分でお役所を辞職した事なんでしょう。私が云うと、月給が取れなくなつたのを氣にするようで口惜^くしいから、何にも口へは出さなかつたけれど、貴方、この間から鬱^{ふさ}いでいるのはその事でしょう。可^いいじゃありませんか。踏^ふんだり蹴^けたりされるのを見ちや、掏賊^{すり}だつて助けまいものでもない、そこ

が男よ。ええ、私だつて柳橋に居りや助けるわ。それが悪けりや世間様、勝手になさいな。またお役所の事なんか、お墓のお母さんつかもそう云いました。蔦がどんな苦勞たのしでも楽しみにしますから、お世帯向は決して御心配なさいますなつて、……云つてましたよ。

早瀬 難ありがた有おい、俺おいら嬉しいぜ。

お蔦 女房に礼を云う人がありますか。ほんとうにどうかしていらんだよ。

早瀬 馬鹿な。お前のお母さんつかに礼を云うのよ。しかし世帯の事なんか、ちつとも心配しているんじゃない。

お蔦 じゃ何を鬱ぐんですよ。

早瀬 何という事はない、が、月を見な、時々雲も懸るだろう。

星ほどにも無い人間だ。ふつと暗闇にもなろうじやないか。：

：いや、家内安全の祈禱は身勝手、御不沙汰の御機嫌うかがいにおまいりしながら、愚痴を云つてちや境内で相済まない。：

：さあ、そろそろ帰ろう。（立ちかける。）

お薦 （引添いつつ）ああ、ちよつと、待つて下さいな。

早瀬 何だ。

お薦 あの、私は巳年で、かねて、弁天様が信心なんです。……

ここまで来て御不沙汰をしては気が済まないから、石段の下までも行つて拜んで来たいんですから、貴方、ちよつとの間よ、待つていて下さいな。

早瀬 ああ、行くが可い、ついで、と云つては失礼だが、お前のばず忍まで行つてはどうだ。一所に行こうよ。

お蔭 まあ、珍しい。貴方の方で一所なんて、不思議だわね。

(顔を見る)でも、悪い方へ不思議なんじゃないから私は嬉しい。ですがね、弁天様は一所は悪いの。それだしね、私貴方にないしょ内証々々で、ちよつと買つて来たいものがありますから。

早瀬 お心まかせになさるが可い。

お蔭 いやに優しいわね。よしませうか、私、……よそうかしら。

早瀬 なぜ、他の事とは違う、信心ごとを止よしちや不可いない。

お蔭 でも、貴方が寂しそうだもの。何だか災難でもかかるんじ

やないかと思つて、私氣になつて仕ようが無い。

早瀬 詰つまらん事を。災難なんか張倒す。

お蔭 おお、出来でかした、宿のおまえさん。

早瀬 お茶屋じゃない。場所がらを知らないかい。

お蔭 嬉しい、久しぶりで叱られた。だけれど、声に力がないね

え。(とまた案ずる。)

早瀬 早く行つて来ないかよ。

お蔭 あいよ。そうそう、鬱うつとう陶とうしいからつて、貴方が脱だいだ外が

いとう套いとうをここに置きますよ。夜露がかかる、着た方が可いいわ。

氣転ききかして奥と口。

お蔭 (拍かしわで手うつ。)

天神様、天神様。

早瀬 何だ、ぶしつけな。

お蔭 (それには答えず) やどをお頼み申上げます。

早瀬 (ほろりと泣く。)

お蔭 (行きかけつつ) 貴方、見ていて下さいな、石段を下りるまで、私一人じゃ可恐いんですもの。

早瀬 それ見ろ、弱虫。人の事を云う癖に。何だ、下谷上野の一人あるきが出来ない娘じゃないじゃないか。

お蔭 そりや棲を取ってりや、鬼が来ても可いけれども、今じゃ按摩も可恐いんだもの。

早瀬 可し、大きな目を開いて見ていてやる。大丈夫だ、早く行

きなよ。

お蔦 あい。

互に心合鍵に、

早瀬見送る。——お蔦行く。——

.....

はれて逢われぬ恋仲に、人に心を奥の間より、しらせ嬉しく
みちとせ
 三千歳が、

このうたいっぱいに、お蔦急ぎあしに引返す。

早瀬、腕をこまぬ拱きものおもいに沈む。

お蔦 (うしろより) 貴方、今帰ってよ。兄さん。

早瀬 ああ。

お蔭 私は……こつちよ。

早瀬 おお早かったな。

お蔭 いいえ、お待遠さま。……私、何だか、案じられて気が急せいて、貴方、ちよつと顔を見せて頂戴（背ける顔を目にしてすが継つる）ああ（嬉しそうに）久しぶりで逢ったようよ。（さしのぞ覗く）
 どうしたの。やはり屈託そうな顔をして。——こうやって一所
 に来たのは嬉しいけれど、しつけない事して、——天神様のおそば傍はよし、ここを離れて途中でまた、魔がさすと不可いません。
 急いで電車で帰りましょう。

早瀬 お前、せいせい云つて、ちと休むが可いい。

お蔭 もう沢山。

早瀬 おまいりをして来たかい。

お薦 ええ、なかちよう仲町の角から、（軽く合掌す）手を合せて。

早瀬 何と云つてさ。

お薦 まあ、そんな事。

早瀬 聞きたいんだよ。

お薦 ええ、話すわ。貴方に御両親はありません、その御両親と

も、お主とも思います。貴方の大事なお師匠さま、まさごちよう真砂町の

先生、奥様、お二方を第一に、御機嫌よう、お達者なよう。そ

して、可愛いお嬢さんが、け決して決してこうの河野なんかと御縁組な

さいませんよう。

早瀬 それから。

お蔭 それから？

早瀬 それから、……

お蔭 だって、あとは分つてるじやありませんかね。ほほほほ。

早瀬 (ともに寂しく笑う) ははは、で、何を買って来たんだい、
買ひものは。

お蔭 (無邪気に莞爾にここにこ々々しつ) いいもの、……でも、お前さんには気に入らないもの、それでも、気に入らせないじやおかないもの、嬉しいもの、憎いもの、ちよつと極きまりの悪いもの。

早瀬 何だよ、何だよ。

お蔭 ああ、悪かった。……坊やお土産を待っていたんだよ。
そんなら、何か買って上げりや可よかった。……堪忍おしよ。い

い児こだねえ。

早瀬 可いいから、何を買ったんだよ。

お蔭 見せましょうか、叱らない？

早瀬 ……

お蔭 叱ったって、もう買ったんだから構わない、（風呂敷より

紙づつみを出す）鬚まげがた形よ、円まるまげ鬚の。仲町に評判な内がある

んですわ。

早瀬 鬚形を、お蔭。（思わずそのつつみに手を掛く）俺おれの位牌いはい

でも買や可いいのに。

お蔭 まあ、お位牌はちゃんと飾って、貴方のおふた親に、お氣

に入らないかも知れないけれど、私や、私ばかりは嫁の氣で、

届かぬながら、朝晩おもりをしていますわ。

早瀬 樹から落ちた俺の身体からだだ。……優しい嫁の孝行で、はじめて戒名が出来たくらいだ。俺は勘当されたツて。……何をお前、両親がお前に不足があるものか。——位牌と云うのは俺の位牌だ。——

お蔭 ええ。

早瀬 お蔭、もう俺や死んだ気になって、お前に話したい事がある。

お蔭 (聞くと齊ひとしく慌あわただしく両手にて両方の耳を蔽おおう。)

早瀬 ちよつと、もう一度掛けてくれ。

お蔭 (ものも言わず、頭をふる。)

早瀬 よ。（と胸に手を当て、おそうとして、火に触れたるがごとく、ツト手を引く）死ぬ気になつて、と聞いたばかりで、動悸はどうだ、震えている。稲妻を浴びせたように……可哀相に……チョツいつそ二人で巡礼でも……いやいや先生に誓つた上は。——ええ、俺は困つた。どうしよう。（倒るるがごとくベンチにうつむく。）

お薦 （見て、優しく擦寄る）聞かして下さい、聞かして下さい、私や心配で身体がすくむ。（と忙しく）早く聞かして下さいな。（と静に云う。）

早瀬 俺が死んだと思つて聞けよ。

お薦 可厭。（烈しく再び耳を圧う）何を聞くのか知らないけれ

ど、あなた貴下この二三日の様子じゃ、雷様より私は可こ恐わいよ。

早瀬 （肩に手を置く）やあ、ほんとに、わなわな震えて。

お蔭 ええ、たとい弱くツて震えても、貴方の身替りに死ねとでも云うんなら、喜んで聞いてあげます。貴方が死んだつもりだなんて、私や死ぬまで聞きませんよ。

早瀬 おお、お前も殺さん、俺も死なない、が聞いてくれ。

お蔭 そんなら、……でも、可こ恐わいから、目を瞑くまいで。

早瀬 お蔭。

お蔭 ……………

早瀬 俺とこれツきり別れるんだ。

お蔭 ええ。

早瀬 思切つて別れてくれ。

お蔭 早瀬さん。

早瀬 ……………

お蔭 串じょうだん戯だん じゃ、——貴方、なさそうねえ。

早瀬 洒落しやれや串戯だんで、こ、こんな事が。俺は夢になれと思つてい
る。

跡には二人さし合あも、涙拭ぬぐうて三千歳が、恨めしそうに顔を
見て、

お蔭 ほんとうなのねえ。

早瀬 俺があやまる、頭を下げるよ。

お蔭 切れるの別れるのツて、そんな事は、芸者の時に云うもの

よ。……私にや死ねと云つて下さい。鳶には枯れる、とおつしやいました。

ツンとしてそがいになる。

早瀬 お鳶、お鳶、俺は決して薄情じゃない。

お鳶 ええ、薄情とは思いません。

早瀬 誓つてお前を厭あきはしない。

お鳶 ええ、厭たまかれて堪たまるもんですか。

早瀬 こつちを向いて、まあ、聞きなよ。他ほかに何も鬱ふさぐ事はない、

この二三日、顔を色あやしを怪まれる、屈託はこの事だ。今も言おう、

この時言おう、口へ出そうと思つても、朝、目を覚さませば俺より

前に、台だいどころ所でおかかを搔く音、夜寝る時は俺よりあとに、

あかりの下で針仕事。心配そうに煙管きせるを支ついて、考えると見ればお菜かずの献立、味噌みそこし漉で豆腐を買う後姿を見るにつけ、位牌の前へお茶湯ちやとうして、合せる手を見るにつけ、咽喉のどを切つても、胸を裂いても、唇を破つても、分れてくれとは言えなかつた。先刻さつきも先刻、今も今、優しいこと、嬉しいこと、可愛いことを聞くにつけ、云おう云おうと胸を衝くのは、罪も報いも無いものを背後うしろからだまし打うちに、岩か玄翁げんのうでその身体からだを打碎くだくような思いがして、俺は冷汗に血が交つた。な、こんな思おもいをするんだもの、よくせきな事だと断念あきらめて、きれると承知しやうちをしてくん。……お前に、そんなに拗すねられては、俺は活いきてる空はな
い。

お薦 ですから、死ねとおっしやいよ。切れる、別れる、と云うから可厭いやなの。死ねなら、あい、と云いますわ。私や生命いのちは惜おしくはない。

早瀬 さあ、その生命に、俺の生命を、二つ合せても足りないほどな、大事な方を知っているか。お前が神かみほとけ 仏を念ずるにも、まず第一に拝むと云った、その言葉が嘘でなければ、言わずとも分るだろう。そのお方のいいつけなんだ。

お薦 (消ゆるがごとく崩折くずおれる) ええ、それじゃ、貴方の心でなく、別れる、とおっしやるのは、真砂町の先生の。(と茫ぼうぜ)

然んとす。()

早瀬 己おれは死ぬにも死なれない。(身を悶もだゆ。)

お蔦 （はつと泣いて、早瀬に縫^{すが}る。）

一日逢わねば、千日の思いにわたしや煩うて、針や薬のしるしさえ、泣^{なき}の涙に紙濡らし、枕を結ぶ夢さめて、いとど思いのますかがみ。

この間に、早瀬、ベンチを立つ、お蔦縫るようにあとにつき、双方涙の目に月を仰ぎながら徐^{しずか}にベンチを一周す。お蔦さきに腰を落し、立てる早瀬の袂^{たもと}を控う。

お蔦 あきらめられない、もう一度、泣いてお膝に縫^{すが}っても、是非もしようもないのでしょうか。

早瀬 実は柏^{かしわ}家の奥座敷で、胸^{あいくち}にヒ首^{あいくち}を刺されるような、御意見を被^{こうむ}った。小芳^{こよし}さんも、蒼^{あお}くなつて涙を流して、とりなし

てくんなすつたが、たとい泣いても縋つても、こがれ死じにをしても構わん、おれの命令だ、とおっしゃってな、二の句は続かん、小芳さんも、俺も畳へ倒れたよ。

お薦けしき（やや気色けしきばむ）まあ、死んでも構わないと、あの、ええ、死ぬまいとお思いなすつて、……小芳さんの生命いのちを懸けた、わけしりでいて、水臭い、芸者の真まことを御存じない！ 私死にます、柳橋の薦吉は男こがに焦こがれて死んで見せるわ。

早瀬 これ、飛んでもない、お前は、血相もつたい変えて、勿体もつたいない、意地で先生たてに楯たてを突く気か。俺がさせない。待て、落着いて聞けと云うに！——死んでも構わないとおっしゃったのは、先生だけ、……お前と切れる、女を棄てます、と誓ったのは、

この俺だが、どうするえ。

お薦 貴方をどうするつて、そんな無理なことばツかり、情があるなら、実があるなら、先生のそうおっしゃった時、なぜ推返して出来ないまでも、私の心を、先生におっしゃってみては下さいません。

早瀬 血を吐く思いで俺も云った。小芳さんも、傍で聞く俺が極りの悪いほど、お前の心を取次いでくれたけれど、——四の五の云うな、一も二もない——俺を棄てるか、おんな婦を棄てるか、さあ、どうだ——と胸つきつけて言われたには、何とも返す言葉がなかった。今もつて、いや、じんみらいざい尽未来際、俺は何とも、ほか他に言うべき言葉を知らん。

お蔭 (間) ああ、分りました。それで、あの、その時に、お前さん、女を棄てます、と云つたんだわね。

早瀬 堪忍しておくれ、濟まない、が、たしか確に誓つた。

お蔭 よく、おつしやつた、男ですわ。女房の私も嬉しい。早瀬さん、男は……それで立ちました。

早瀬 立つも立たぬも、お前一つだ。じゃ肯きぎわ分けてくれるんだね。

お蔭 肯分けないでどうしましょう。

早瀬 それじゃ別れてくれるんだな。

お蔭 ですけど……やっぱり私の早瀬さん、それだからなお未練が出るじゃありませんか。

早瀬 また、そんな無理を言う。

お蔭 どツちが、無理だと思ふんですよ。

早瀬 じゃお前、私がこれだけ事を分けて頼むのに、肯入れちゃくれんのかい。

お蔭 いいえ。

早瀬 それじゃ一言、清く別れると云つてくんなよ。

お蔭 ……………

早瀬 ええ、お蔭。(あせる。)

お蔭 いいですよ。(きれぎれに且つ涙) 別れる切れると云う前に、夫婦で、も一度顔が見たい。(胸に縫^{すが}つて、顔を見合わす)。

見る度ごとに面瘦^{おもや}せて、どうせながらえいらねば、殺して

行つてくださんせ。

お蔭 見納めかねえ——それじゃ、お別れ申します。

早瀬 (涙を払い、気を替う) さあ、ここに金子かねがある、……下

すつたんだ、受取つておいておくれ。(渡す。)

お蔭 (取ると齊ひとしく) 手切れかい、失礼な、(と擲なげうたんとして、

腕の萎なえたる状さま) あの、先生が下すつたんですか。

早瀬 まだ借金も残つていよう、当座の小使いにもするようには、

とお心づけ下すつたんだ。

お蔭 (しおしおと押頂く) こうした時の気が乱れて、勿体ない

事をしようとした、そんなら私、わざと頂いておきますよ。

(と帯に納めて、落したる鬚まげ形がたの包に目を注ぐ。じつと泣き

つつ拾取つて砂を払うも、荷になつてなぜか重い。打棄つて行きたいけれど、それでは拗ねるに当るから。

早瀬　で、お前はどする。

お薦　私より貴方は……そうね、お源坊が実体に働きますから、

当分我慢が出来ましょう。私……もう、やがて、船の胡瓜も

出るし、お前さんの好きなお香々をおいしくして食べさせて

誉められようと思つたけれど、……ああ何も言うのも愚痴らし

い。あの、それよりか、お前さんは私にばかり我ままを云う癖

に、遠慮深くつて女中にも用はいいつけ得ないんだもの。……

これからはね、思うように用をさして、不自由をなさいますな。

……寝冷をしては不可ませんよ。私、山百合を買つて来て、早

く咲くのを見ようと思つて、苔つぼみを吹いて、ふくらましていたんですよ、水を遣やつて下さいな……それから。

早瀬 (うつむいて頷うなずいてのみいる、堪たまりかねて) 俺も世帯を持つちやいないよ。お前にわかれて、何の洒落しやれに。

お蔭 まあ、どうして。

早瀬 それでなくツてさえ、掏賊すりの同類だ、あいずりだと、新聞で囃はやされて、そこらに、のめのめ居られるものか。長屋は藻もぬけて、静岡へ駈落かけおちだ。少し考えた事もあるし、当分引込ひっこんでいようと思う。

お蔭 遠いわねえ。静岡ツて箱根のもツと先ですか。貴方がここに待つていて、石段を下りたばかりでさえ、気が急せいてならな

かったに、またいつ、お目にかかれるやら。（と膝にうつむく。）

早瀬 お薦、お前は、それだから案じられる。忘れても一人でないぞ、江戸の土を離れるな。静岡は箱根より遠いかは心細い。……ああ、親はなし、兄弟はなし、伯父叔母というものもなし、俺ばかりをたよりにしたのに、せめて、従いとこ兄妹が一人ありや、俺は、こんな思いはしやしない！……よう、お薦、そしてお前は当分どうするつもりだ。

お薦（顔を上ぐ）貴方こそ、水がわり、たべものに気をつけて下さいよ。私の事はそんなに案じないが可ようござんす。小児こどもの時から髪を結うのが好きで、商売をやめてから、御存じの通り、

いちようがえ
 銀杏返しなら人の手はかりませんし、お源の島田の真似もします。慰みに、お酌しやくさんの桃割ももわれなんか、お世辞にも誉ほめられました。めの字のかみさんが幸い髪結かみゆいをしていますから、八丁堀へ世話になって、梳手すきてに使ってもらいますわ。

早瀬 すき手にかい。

お薦 ええ、修業をして。……貴方よりさきへ死ぬまで、人さんの髪を結ゆましょう。私は尼になった気で、（風呂敷を髪あねに姉さんかぶりす）円鬘まるまげに結いって見せたかったけれど、いつその方が似合うでしょう。

早瀬 （そのかぶりものを、引手ひったぐ繰ぐるってつと立つ）さあ、一所に帰ろう。

お蔭（外套を羽織らせながら）あの……今夜は内へ帰っても可
いの。

早瀬 よく、肯分けた、お蔭、それじゃ、すぐに、とぼとぼと八
丁堀へ行く気だったか。

お蔭 ええ、そうよ。……じゃ、もう一度、雀に餌が遣れるのね、
よく馴染んで、櫛子窓の中まで来て、可愛いツたらないんで
すもの。……これまで別れるのは辛かったわ。

早瀬 何も言わん。さあ、せめて、かえりに、好きな我儘を云
つておくれ。

お蔭（猶予いつつ）手を曳いて。

いえど此方は水鳥の浮寝の床の水離れ、よしあし原をたちか

ぬれば、

この間に早瀬手を取る、お蔦振返る早瀬もともに、ふりかえり伏拝む。

さて行かんとして、お蔦衝と一方に身を離す。

早瀬 どこへ行く。

お蔦 一人々々両側へ、別れたあとの心持を、しみじみ思つて歩行いてみますわ。

早瀬 (うなずく。舞台を左右へ。)

お蔦 でも、もう我慢がし切れなくなつて、私もしか倒れたら、駈けつけて下さいよ。

早瀬 (頷く。)

お蔭 切通しを帰るんだわね、おもいを切つて通すんでなく、
からだ体を裂いて分れるような。
 身か

早瀬 (頷く。)

お蔭しおしおと行きゆかかり、胸のいたみをおさえて立留たちどる、早
 瀬ハツと向合う。両方おもてを見合あわす。

実げに寒山のかなしみも、かくやとばかりふる雪に、積たまる……

幕外へ。

思いぞ残しける。

男は足早に、女は静しずかに。

——幕——

大正三(一九一四)年十月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

1942（昭和17）年7月刊行開始

入力：門田裕志

校正：林 幸雄

2002年2月12日公開

2005年9月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

湯島の境内

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>